

漁況海況予報調査

I 調査目的

この事業は、沿岸沖合漁業に関する漁況海況の調査研究および資源研究の結果にもとづいて予報を作成するとともに、漁況海況情報を迅速に収集・処理することにより漁業資源の合理的利用と操業の効率化を図り、漁業経営を安定に役立てることを目的とする。

II 調査内容

1. 調査期間 昭和52年4月1日～53年3月31日
2. 調査場所 本県沿岸・沖合海域
3. 調査船 試験船 幸洋丸、東奥丸、瑞鷗丸、青鵬丸
4. 担当者 主任研究員 赤羽光秋
“ 十三邦昭
技師 田村真通
“ 小田切譲二
“ 高梨勝美
“ 鈴木史紀
臨時 清野千花子
5. 調査項目
 - (1) 太平洋沖合定線観測
 - (2) 日本海沿岸定線観測
 - (3) スルメイカ漁場一斉調査
 - (4) サンマ漁場一斉調査
 - (5) 沿岸・沖合漁況調査
 - (6) 漁海況情報事業に係る標本漁船調査

III 調査方法

- (1) 太平洋沖合定線及び日本海沿岸定線観測

第一図に示したとおり、日本海の14定点太平洋の26定点において、各層測温・塩検、海気象観測及び生物採集（魚卵・稚仔・プランクトン採集）を実施した。

各層の深度は、0、10、20、30、50、75、100、150、200、300、400、500m（日本海は400mまで）とした。

(2) スルメイカ漁場一斉調査

第 2 図に示した定点において太平洋（6 月瑞鷗丸，9 月幸洋丸）2 回，漁場観測とスルメイカ及び他のイカ類分布調査を実施した。

(3) サンマ漁場一斉調査

第 3 図に示した海域において東奥丸により漁場観測と流し網 2 反使用によるサンマ分布調査を実施した。

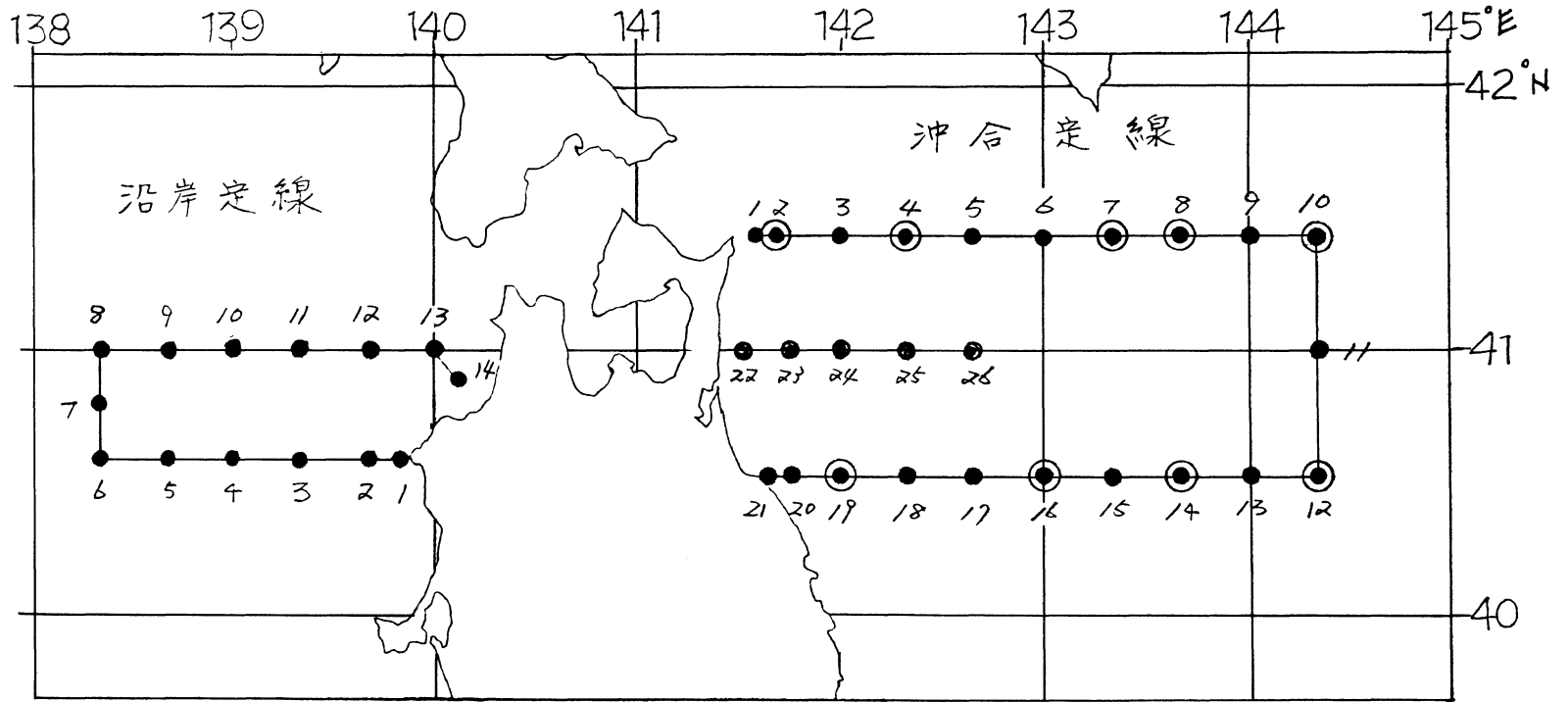
(4) 漁 況 調 査

県内主要 11 港より 9 魚種について毎月 1 回入港船隻数，漁獲量，漁場位置，魚体の大きさ等を調査し毎月 1 回発行する漁海況月報に漁況のとりまとめを行なった。

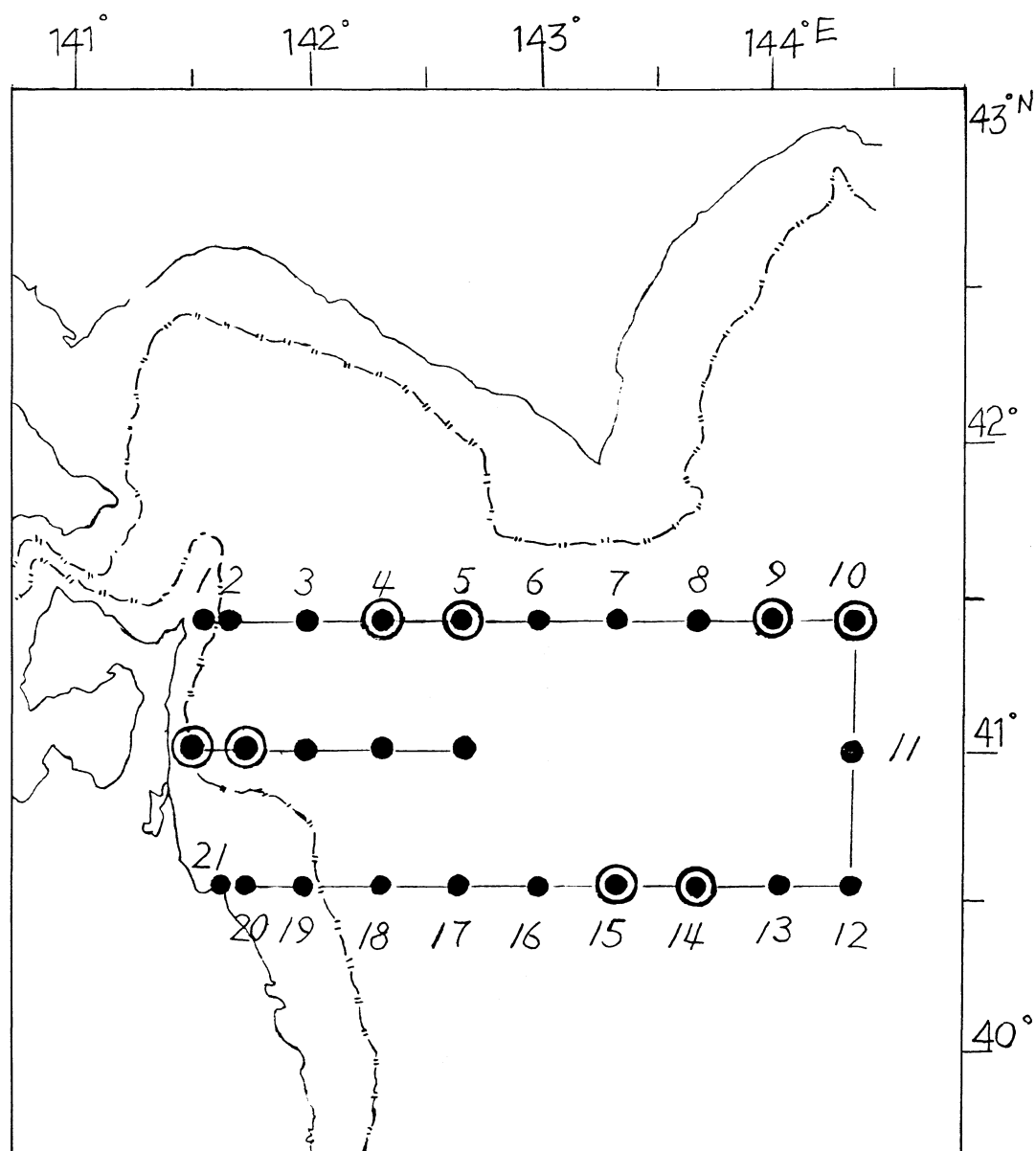
(5) 漁海況情報事業に係る標本船調査

日本海漁海況情報事業（社団法人漁業情報サービスセンター事業）に係る標本漁船調査を 4～7 月，10 月の 5 ケ月間実施した。日本海マス，スルメイカ当業船より 15 隻を選定し，これらから鰺ヶ沢漁業用海岸局を経由して水温情報延 654 件を収集し，延 22 回漁業情報サービスセンターにテレックス送信した。

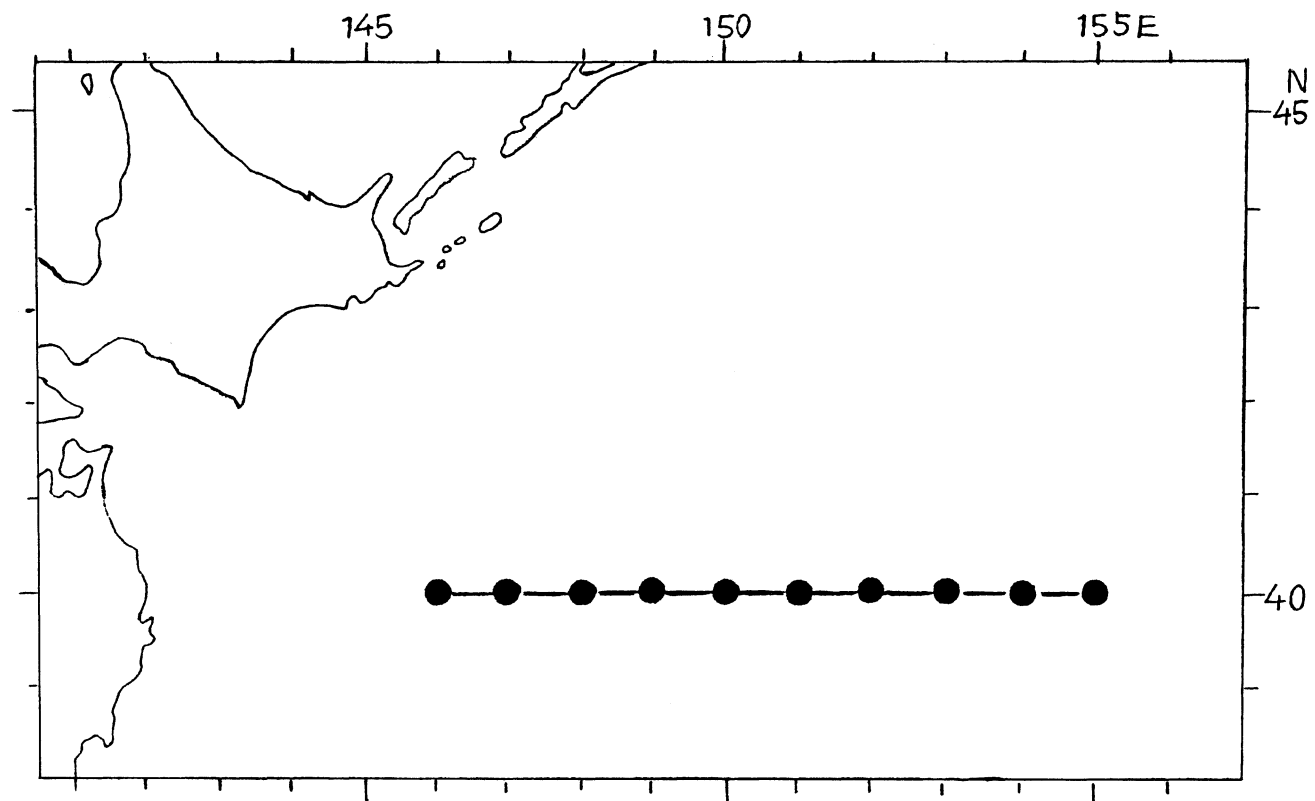
第 1 図 沿岸定線，沖合定線



第2図 太平洋スルメイカ漁場一斉調査定点



第 3 図 サンマ漁場一斉調査定点図



IV 調 査 結 果

1. 海況の推移と特徴

(1) 日 本 海

対馬暖流の最高水温は平年より低めに推移した月が多く、また暖流水魂の厚さ、流量計算値も平年より小さい月が多かった。対馬暖流は昨年に引続き弱勢気味に推移したものと推測される。

沖合冷水接岸の状況は 8 月、10 月のみ平年より離岸気味に推移したが他の時期は平年並か接岸傾向がみられた。

(2) 太 平 洋

津軽暖流の水温は 3 月、10 月、11 月に高めだった外は平年並か低めに推移しており、この源である対馬暖流の流勢が平年並か弱勢気味に推移したことと一致している。

尻屋崎沖の津軽暖流の東方への張出しは 5、6 月では、例年より広く、E 143.2°～E 143.3°付近まで張り出していたが、8 月以降平年より狭めに推移した。

5 月、6 月、8 月、9 月、10 月の観測で把握された親潮第 1 分枝の張出は昨年に引続き顕著で、親潮は昨年程ではないにしろ、比較的強勢であったことがうかがえる。

近海（E 143°～144° 付近）を北上する黒潮分派は 6 月までは親潮接岸分枝の強勢により北端は N 41° 付近までにおさえられていたが、8 月以降急速に北上傾向が認められた。

2. 漁況の推移と特徴

(1) 日本海沿岸

日本海側では春期（6 月）対馬暖流の弱勢が影響したものと考えられるが、スルメイカ、マグロ、ブリ、サバ、アジなど暖流系魚類の漁期の遅れが目立ち、マイワシを除いて、これらの魚はどれも例年になく不振で、沿岸の夏イカは 1,711 トン、秋イカは 318 トンと 49 年に次ぐ不漁であった。大型定置網漁業ではマイワシ 18 トンで近年最高であるが、マサバ 28 トン、マアジ 1 トン、ブリ 21 トン、マグロ 19 トンは近年の最低であった。

ヤリイカは 1,050 トンで例年の約 3 倍で過去にみられぬ豊漁であった。

(2) 津軽海峡沿岸

津軽海峡のスルメイカ漁も近年になく漁期の遅れが目立ち、漁況は不振であった昨年を更に下廻り、2,163 トンであったが、ヤリイカの漁期は日本海同様、非常に早かったのが特徴である。

(3) 陸 奥 湾

後潟では日本海、太平洋と逆にマイワシは昨年、一昨年の 30～50% 程度（329 トン）の漁獲よりなかったが、マサバは 107 トンで過去 5 ヶ年平均（70 トン）を大巾に上廻った。

(4) 太平洋沿岸

沿岸のスルメイカ漁は、昨年同様、近年では最も初漁が遅く漁況も不振であった昨年を更に下

廻り（192トン）空前の大凶漁となった。しかし、マイワシ（三陸沖7トン、道東沖46トン）とマサバ（三陸沖23万トン）は近年にない好漁であった。

(5) 沖 合

八戸港、大畑港に水揚げされたアカイカの漁獲量は61,753トンで昨年の約2倍を示し、8、9月に尻笏沖及び八戸沖40哩の近海に漁場形成がみられたことは特異な現象であった。

一方、日本海沖合水域におけるスルメイカ漁獲量は、本県では28,682トンで昨年の47,572トン、一昨年の58,537トンを大巾に下廻った。この原因は資源低迷もさることながら200カイリ規制の影響によるものであろう。

また、棒受網による太平洋沖合のサンマ漁は、八戸港に9～11月まで2,260トンの水揚げもなく過去5ヶ年平均（5,375トン）の約 $\frac{1}{2}$ 程度の低い水準であった。